

氏名	カワ イ サ キ コ 河合佐季子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第213号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉吾妻能狂言の研究－その芸能と後世への影響－ 〈演奏〉2代目杵屋勝三郎 長唄「安達ヶ原」

総合審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(音楽学部)	小島直文
(副査)	〃	教授	( 〃 )	三浦正義
	〃	〃	( 〃 )	武田孝史
	〃	准教授	( 〃 )	味見純
	〃	教授	( 〃 )	塚原康子

(論文内容の要旨)

本稿の目的は吾妻能狂言の詳細な芸能を明らかにし、日本音楽史の中に正しく位置付ける事である。吾妻能狂言は、明治維新により困窮した能楽師の窮余の一策として発生した鶴的大衆能楽として放置され、残された資料の少なさ故に曖昧な定義のままとなっている。しかし能楽と三味線音楽が垣根を超えて融合を図ったこの芸能からの影響は、今も尚様々な音曲に残り、また現代活発化している他種目のコラボレーションを伴った邦楽公演の行く末をも、吾妻能狂言の盛衰から見ることはできないのかと考えた。第1部では主に、興行の番組、『諸芸人名録』、新聞記事を考察の根拠とし、発生時期や場所、出演者、上演形態、演目の傾向の順に検証を行う事で、芸能の実態に迫った。その結果第1に、筆者は興行時期を明治2年～14年と推測。歌舞伎的要素を施した浅草蔵前の日吉左衛門宅能舞台を起点に行われた事が判明した。その他、新潟遠征を含む新たな興行場所、催主、演奏者達を提示、先行研究にも訂正を加えた。第2に、役者と伴奏者に着目し詳細な考察を行った。まず役者には鷺流狂言師が大挙して参加している事から、一般的定説として唱えられていた、代表者の日吉左衛門は発案者、または舞台や装束等の提供者に過ぎず、実質的統括は新作台本も残している鷺流狂言師の名女川庄三郎が行ったとの見解を示した。と同時に、この芸能の衰退と共に廃絶へ追い込まれた鷺流狂言の残した後世歌舞伎界への影響が具体的に浮かび上がってきた。次に伴奏者の代表として、長唄三味線方の2代目杵屋勝三郎の活動や作曲の変遷を追う事で、明治初期、彼が活動の拠点を吾妻能狂言に移し、多数新作を作曲、この参加をもとに能の趣に忠実な謡曲物長唄の作風へと変化されていったことが判明した。同じく伴奏者の囃子方藤舎芦船は、単なる囃子方の代表ではなく、興行への出演回数や、東流二弦琴の祖の顔を持っていた事、歌舞伎と能楽の囃子方を務めた経歴等から、役者と伴奏者を繋ぐ役割を担い、特に新作物に関しては音楽監督的存在であったと推測した。第3に番組の体裁から、上演形態について始め能のみを上演していたが、徐々に長唄、隆盛期には浄瑠璃を含む様々な種目の音曲を伴った新作物の上演が行われた事が判明した。中でも日数能興行は梅若舞台での日数能に模倣、対抗したものと考えられ、これが吾妻能狂言衰頹の一因となったとの新たな見解を示した。更に上演演目をリスト化することで、上演内容の傾向を検証した。結果、圧倒的に狂言を古典の形式で上演する事が多かった事が分かり、一方長唄を中心にした浄瑠璃や三曲を伴った新作の折衷演目の殆どが、能を題材にしていると判明した。そしてこの芸能への参加をきっかけに、既存曲の改変や現行曲の作曲が行われた事例が浮かび上がり、吾妻能狂言の近世音曲へもたらした影響の大きさが改めて浮き彫りとなった。次に第2部では、この影響の一

端を見るべく現行曲〈安宅勸進帳〉について実演を交えた考察を進めた。まず一連の“安宅物”を検証し、吾妻能狂言の番組資料等による推測を基に、この時明治5年、吾妻能狂言での上演に於いてこの曲の土台が成立した、との持論を展開、曖昧であった〈安宅勸進帳〉の概念を明らかにした。更に〈安宅勸進帳〉の実演を通して、現在伝承の途絶えかけている〈安宅の新関〉の復元等を盛り込んだ筆者オリジナルの演奏構成を報告し、〈安宅勸進帳〉の新たな演奏法の可能性をも提示した。最後に筆者は、政府の改革により自国の文化である邦楽が軽視された明治初期と、洋楽の浸透により人々の関心が薄れている昨今の邦楽界の現状の類似に目を向けた。こうした世相は明治初期、吾妻能狂言を含む大衆化された芸能を生み出し、現代に於いてもまた、洋楽や他種目の邦楽とコラボレーションを行う公演が増えている事例に現れていると言えよう。吾妻能狂言に於いて先人が残した教訓を現代に生かすべく、本論にてこの芸能の芸態と本質を明らかにし、現在への影響を鑑みることでその功績を称え、吾妻能狂言の盛衰に見る、各々の芸能の基本を固めた上で本質に対する精神を忘れず、聞く者を思いやる芸能を展開していく必要性を、今後の邦楽界の未来に向け、訴えて行きたいと考える。

#### (総合審査結果の要旨)

河合佐季子の博士課程の学位審査の演奏会が、平成24年2月9日18時から奏楽堂に於いて行われた。曲目は論文のテーマである吾妻能狂言に関わった二代目杵屋勝三郎作曲「安達ヶ原」を取り上げた。45分に及ぶ大曲で、曲の前半は老女の台詞・山伏の台詞を地合（じあい）という旋律的に語る部分を三味線の音色と緩急で弾き分け、また老女の心境も思い入れを込めて表現できた。後半の鬼女になってからは、独奏の部分が特に力強い音色に変わり、唄方との息も合い気迫に満ちた演奏ができ、当初は広い奏楽堂での演奏を心配していたが、心配のみで終わった。通常、年齢的にも演奏しがたい曲であるが、度重なるレッスンと練習を重ね、本人の熱意と助演者にも助けられ緊張感のある良い演奏であった。

論文の題目である「吾妻能狂言」は明治維新後、将軍をはじめ大名の保護を受けられなくなった能楽師の危機と、芝居音楽的長唄のマンネリ・能楽を崇拝する高尚趣向の三味線演奏家との合致が伴い、能楽と三味線音楽との異種融合芸能として興行されたが、次第に能楽の復興と共に衰退し10年余りで廃絶した。その為、番組等の資料は抹消され、数少ない残された資料を基に考察し、また新しい番組の発見で皆無に等しい資料の現在、後世の為に重要な参考文献になるに足る価値を持っている。

以上を総合して、博士の学位にふさわしい演奏と論文であり、審査員全員一致で「(削除)」として合格を認めた。